



企業編

有限会社
南酒造

安岐町下山口269番地1

設立：明治元年
従業員：6名



左から3番目が現当主の菅嶋瑠美さん

南酒造は、明治元年に創業し、安岐町下山口で清酒「有明」を製造していました。開業以来日本酒の需要は高く、順調に事業を行っていましたが、第2次世界大戦中に国から日本酒の生産量を制限されました。そこで、東国東郡内の生産調整を、酒造組合の役員で受けることになり、南酒造は一時休業することになりました。休業の間は、蔵を芝居小屋にするなどのやりくりをする一方で、休業した役員同士で焼酎の研究を始めました。戦後、酒造りが再開された際、4代目当主の南延男さんは、日本酒を造るノウハウを活かして、米焼酎「躍進」を製造しました。昭和52年に息子の勝之さん



が加わり、営業に力を入れましたが、ほとんど日本酒しか飲まれていない時代に、焼酎はなかなか受け入れてもらえませんでした。昭和63年頃、5代目当主となっていた勝之さんが、当時人気が出始めていた麦焼酎造りに乗り出し、延男さんと共に「とつぱい」を開発しました。「とつぱい」の口当たりが良いすっきりした味は、口コミで徐々に広がっていき、国東市内で多くの方から支持してもらえるようになりました。そして、勝之さんは、研究熱心だった先代が造った焼酎の味に挑戦するため、厳選した素材が生み出すしっかりとした味の麦焼酎「喜納屋」を製造しました。三年前、祖父 延男さんや父 勝之さんの酒造りに取り組む姿を長年見てきた娘の瑠美さんが、焼酎造りに加わりました。瑠美さんは、「2000年代初頭にあった焼酎ブームなど、事業を拡大するチャンスはいくつもありました。しかし、先代も先々代も、1つ1つの工程を手作業で行う中で生み出される国東半島の食材に合う味を大事にしてくださいました。私も、代々受け継がれてきた技法を大事にしながら、祖父や父のようにいつかは自分自身で国東の食材に合う味の焼酎を作りたいと考えています」と話していました。

第一次産業編

ウーマン
メイク
株式会社

安岐町大添572番地1

設立：平成27年7月
従業員：14名



左から6番目が代表取締役社長 平山亜美さん

創業者の平山亜美さんは、子育てと両立できる仕事を探していたところ、宮崎県でリーフレタスを水耕栽培している農業法人を視察して起業を決意。平成27年7月に「ウーマンメイク株式会社」を設立しました。平成28年7月、国からの補助金等を受けて完成した水耕栽培のハウス施設は、関東方面に空輸で出荷することを予定していたことから安岐町大添に建設しました。栽培するリーフレタスは、既に出荷の契約をしていた関東方面でスーパーマーケットなどと取引のある食品卸業者からの要望に合わ



せて選定し、女性ばかりでリーフレタスを優しいママのように愛情込めて栽培することなどから「やさいまま」のブランド名で販売することにしました。同年7月に植え付けを行い、お盆過ぎから収穫が始まりました。リーフレタスの栽培は順調にいきました。従業員が少なく人手不足で収穫が間に合わない時期がありました。しかし、夏を過ぎリーフレタスの生育速度が落ち、従業員も揃ったことで、1日2500株を安定して出荷することができるようになりました。また、起業のきっかけとなった「子育てと両立するために女性でもできる農業を始めたこと」から、従業員の職場環境を整えるため、勤務時間のシフトにフレックスマットの導入や休憩室とシャワー室の設置、子供同伴での出勤も認めており、そのような取り組みが認められて「農業をつくる女性活躍経営体100選」に平成30年3月に認定されました。今後は、栽培に関しては、従業員の農業への知識や技術を高めていき、生産量の向上につなげていくことと、リーフレタス以外の品種にも挑戦していきたいと考えています。職場環境に関しては、介護や子育てをしながらでも女性が働きやすい環境づくりを波及していきます。そして、農業は定住しないとできない仕事と考えており、もっと多くの地元の方を積極的に雇用し、地域振興に貢献したいと考えています。

商工会編

有限会社
徳部文具店

安岐町中園467-5

昭和49年4月から
文具店を始める



左から妻の徳部信子さん、伝造さん、息子の敬治さん

創業者の徳部伝造さんは、ミカン栽培などを行う専業農家でしたが、安岐町の中学校が統合され、新しい中学校が安岐町中園に開校したことから、昭和49年4月に徳部文具店を開店しました。開店当初は、文房具だけでしたが、統合した中学校には700名を超す生徒がおり、生徒の要望に応えるためにスポーツ用品や雑貨などの品数を増やしました。また、昭和50年代後半には、大分キャノンが進出し、コピー機やファックスなどの要望に応えるため、事務用機器を取り扱うようになりました。そうして、官公庁では安岐町役場や安岐町内の小中学校、民間企業では国見町まで取引先を広げていきました。平成10年に、県外で会社員をしていた息子の敬治さんが帰省。平成18年の



市町村合併で、国東市内の官公庁と取引できるようになりましたが、民間企業の取引先は徐々に減って来ています。また、開店当時、お店の中で賑わっていた中学生の姿が減って来ています。そのような中、流通機関の発達により、店舗内に商品を多く置かなくてすむようになったことから生まれた空きスペースで、学習塾を始めました。また、伝造さんは、安岐町の有志の方達と一緒に長年にわたり清掃活動を行い、アユの放流事業を行っています。敬治さんは、「現在の取引の大半は、官公庁や企業への受注販売となっています。しかし、中学校や小学校の近くにある「まちの文具店」として地域とのつながりを保つことが地域に必要とされるお店の条件だと思っています。そのためにも、まずは子ども達がお店を利用してもらえるような様々な取り組みを行っていききたいと考えています」と語っていました。